

# 大 大 阪 の 光 と 影 か ら 再 生 探 る

## 展 覧 会

昭和12年のモダン都市へ

大阪大学総合学術博物館

近年、地盤沈下が著しい大阪だが、1925（大正14）年には、優れた都市プランナーだった関一・大阪市長のもとで面積・人口とも東京を抜いて日本最大、世界第6位のマンモス都市に膨張し、「大 大 阪」と呼ばれる繁栄を謳歌した。

大阪大学総合学術博物館（豊中市待兼山町）で開かれている特別展「昭和12年のモダン都市へ」は、37（昭和12）年に大阪市電気局と産業部が製作した観光映画で、近代都市研究上、屈指の映像資料「大 大 阪 観 光」（約28分）を手がかりに、大 大 阪 の 光 と 影 に スポットを当てている。



映画鑑賞後、名所遊覧の絵はがきⅡ写真Ⅱや劇場のポスター、写真、出版物など多彩な展示品で近代都市という名の「迷宮」へと誘い、映画の虚実を思いを巡らせてもらおうという趣向だ。映画の撮影者は戦後「ゴジラ」も手がけた玉井正夫。

開通後間もない地下鉄や最新の設備を備えた市立動物園、市立電気科学館、そして四天王寺などの名所や天神祭、文楽座など大阪の多彩な顔を鮮やかな手並みで切り取ってみせる。だが、感心してばかりはられない。36年に就航した観光艇「水都」からは一瞬、安治川や木津川の水上市生活者たちの姿が見える。

映画のナレーションは工場群から吐き出されるばい煙を古歌「：民のかまどは賑わいにけり：」と重ね合わせ、産業都市大阪の繁栄の象徴のように語る。だが賀川豊彦が22年、夕刊紙に連載した大阪市政のパロディ小説「空中征服」はそれが詐術であり、ばい煙が市民の健康をむしばむ深刻な都市問題であることを暴いている。

今日の大阪が抱える諸問題の中には大 大 阪 の「負の遺産」といえるものも少なくない。暗部に触れた映像や資料は過去を直視するところが大阪再生への道の出発点であることを教えている。

7月11日まで。

【田原由紀雄】